

論文審査の結果の要旨

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第
号	号

氏 名 尹 芷 汐
論 文 題 目

日中大衆化社会と〈事件の物語〉
——「松本清張ブーム」の比較文化論——

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	日比 嘉高
委員	名古屋大学	教授	飯田 祐子
委員	名古屋大学	教授	藤木 秀朗
委員	名古屋大学	准教授	大井田 晴彦
委員	立教大学	教授	石川 巧

[本論文の概要]

本研究は、「松本清張ブーム」を視座としながら、日中の大衆文化社会と両国文学者の交渉を考察した論考である。具体的には、第二次世界大戦後の日本、および1980年代以後の中国における文学とメディア環境の再編成の中で、「事件」を語る物語がどのように機能したか、またそれが日中友好の言説にどのように関わったのかという問題を論じている。

第一部は、松本清張の作品と、戦後日本の週刊誌・総合雑誌・映画などの諸メディアとの連携がいかにして行われたのかを考察している。

第一章は、松本清張の短篇小説『失踪』とその掲載誌である『週刊朝日』を取り上げ、戦後隆盛を迎えた週刊誌と、清張ミステリーの読者戦略との相関を明らかにした論文である。第二章は、戦後の「登山ブーム」を背景にした松本清張の『遭難』と井上靖の『氷壁』、さらには同時代の新聞・雑誌の語り方を対比し、「事件」を語る物語と世論との関係が論じられる。第三章は、1950年代、60年代に言論空間と読書生活の重要な一部となった「内幕もの」(inside books)の系譜の中に松本清張の『日本の黒い霧』を位置づける。その上で、政治の「内幕」を知る欲望がいかに〈事件の物語〉を通じて操作されるものだったかを検証した。第四章は、松本清張の『顔』『あるサラリーマンの証言』などの作品を取り上げ、「悪女」の表象が週刊誌、映画、テレビなど複数のメディアにおいてどのように展開し、相互に影響を与え合ったかを考察する。

第二部は、戦後、日中の文化人・大衆がいかに〈事件の物語〉を媒介に歴史的・政治的認識を共有し、冷戦体制の中で関係の構築を模索したかを考察した。

第五章は、戦後日中文化人ネットワーク、および中国の日本文学翻訳・出版体制を歴史的に整理した上で、「日中友好」というナラティブの誕生、およびそれと〈事件の物語〉との関係性を考察した。第六章は、1960年代の日中作家訪問活動において『日本の黒い霧』が中国に紹介・翻訳された経緯、中国語版に施された自己検閲のありさまを解明した。第七章は、鄧友梅と森村誠一という二人の作家の作品から、「事件」がいかにして戦争の「裏面」を可視化する方法となり、それが「日中友好」のナラティブにどのように結びついたかを分析した。第八章は、中国の法制文学と日本の社会派推理小説を比較し、「名探偵」表象と市民社会との関係性を追求したものである。第九章は、映画『人間の証明』を通して、メディアミックスが国境を越え、日中それぞれのナショナルヒストリーに寄与しているありさまを考察した。第十章は、中国のコミックブック「連環画」へと翻訳された日本文学・映画について資料的な整理を行い、連環画『砂の器』を例に、物語内容がメディアの物質的特徴によって規定される様子を考察した。

[本論文の評価]

松本清張の翻訳作品や、映画化作品とその上映の歴史から、日本と中国との関係、あるいは韓国との関係をさぐった研究は、比較的蓄積がある。だがそれらの先行研究は、松本清張が流行した 1960 年代前後の日本と、たとえば 1980 年代の中国とが、大衆化社会という点において共通する、というような社会的背景に目を向ける方向性だったのに対し、本論文は、「事件」および「日中友好」を語る言説の語りの構造から問題に切り込んでいる。

本論文は二つの観点から評価することができる。一つは、第二次世界大戦後、週刊誌やテレビなど、大衆化していくメディア環境の中で、松本清張がいかなる形の物語を提示し、それが掲載媒体や映像化作品とどのような相互交渉を行っていたのかを、実証的に明らかにした点である。具体的には、週刊誌上で展開される語りの型との比較対照や、「悪女」の表象の多様なメディア間での循環的な変容過程の考察などである。こうした作業を行った例えば第一章は全国レベルの学会誌『日本近代文学』に掲載されたり、その他の論考も他の査読誌や松本清張研究専門誌に掲載されたりしており、その考察の質は高いものであると認定できる。

一方、第二部で展開された 1970~80 年代の日中間の文化交流についての論考も重要な成果と言える。この時代の文学者同士の交流については、まだまだ先行研究が少ない状態にある。今後の研究の流れを見越した重要性から考えれば、本研究の先駆性は明らかである。まだ粗さの残る記述ではあるが、多くの資料にあたりながら、日中の作家間の交流の様子を追いかけ、時代の状況や文化人のネットワークの実態を明らかにした功績は十分に評価できよう。同時に、単なる時代状況の調査だけではなく、「日中友好」をめぐる言説を分析し、そこにアメリカへの対抗と日本の軍国主義の否定とを媒介にした、日中人民の連帯という物語的な型があったことを指摘したことは重要である。

ただし、審査の場においては、〈事件の物語〉という執筆者が用意したキーワードの輪郭が不鮮明であること、参照した文献を注として示す際に粗さがあること、時代状況を説明する際にはより詳細な典拠を示す必要があることなどが指摘された。いずれも、今後執筆者が修正していかなければならない課題であるのは間違いない。とはいえ、どれも本論文が提示した成果の価値を損なうものではなく、上述の本研究の達成は揺るがない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。